



愛隣幼稚園..... 園だより11.9月号

心に刻まれる宝物

長い夏休み、いかがお過ごしでしたか？ 子どもたちに「夏休み、楽しかった？何したの？」そう聞けば大概は「たのしかったよ～、あのね～プール行ってね・・・」と止まらない夏休み報告会の始まりです。「あのね～それでね～」日焼けした顔、きらきらと瞳を輝かせてこの夏の武勇伝を語ってくれます。好対照なのはお母さんたち。幼稚園が始まった安堵の表情の中にもかなりお疲れ気味の様子。私も経験者だけに同情しつつ、でもちょっとだけニヤリとしたりして。頑張っただけの親と、たくさんの良いものを体と心に詰め込んでエネルギー満タンの子どもたち。・・・大変だったけど、でも明日の朝、園庭を走り回る子どもたちをちょっと離れて見て下さい。はじける笑顔の子どもたちの姿で私たちにもエネルギーが充電されます。「お疲れ様でした。がんばりました。」

この夏、小西貴士(愛称はゴリさん)さんという人に出会いました。清里高原で「キープ森のようちえん」が展開する野外保育の活動に携わっている方です。子どもたちを撮った作品からは、小西氏の子どもに向けられた眼差しが感じられて優しい気持ちになります。(9月28日夕方、愛隣幼稚園に来て下さることになりました。詳細はあらためて・・・)その小西氏の講演の中で「沈黙の春」の著者として知られているレイチェル・カーソンの言葉が紹介されました。

「もしこれが、いままでに一度も見たことがなかったものだとしたら？もし、これを二度とふたたび見ることができなかつたら？」そう自分自身に問いかけた時に、見過ごしていた世界の美しさに気付くことができるのです。(センス・オブ・ワンダーより)

この言葉を聞いて私は心の中に刻まれた幾つかの場面を思い出しました。それは、大自然が織りなす壮大な風景、あるいは危うく見過ごしてしまう繊細な風景、人間の力を遥に超えるものが確かに存在する事を私に教えてくれた風景、「見たこともない・・・」という眩きと共に心に刻まれた風景です。改めてその映像を心の中に映し出す時に、一番大切な宝物を愛しむような不思議な温かい感覚に包まれる自分を感じます。思い出してみてください。「一度も見たことがなかった、そして二度とふたたび見ることができない」あなたの心の中に刻まれた風景を。私たちはそれを思い出す時、そうして心に刻まれた風景がどれほど人生を豊かにする宝物であるかということにもきっと気付くはずです。レイチェルは更にこう語っています。「地球の美しさと神秘を感じとれる人は、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはしていないでしょう。」と。

震災から半年、多くの被災地で復興に向けた歩みが進められています。しかし、福島原発周辺ではあの日から時が止まったまま、再生への一歩すら踏みだせない町があります。去年の夏にはここでもたくさん子どもたちが忘れられない風景を心に刻んだことでしょう。かつて子どもだった大人たちがもう一度見たいと願う風景もここにはあったのかもしれませんが。しかし今年の夏、以前と同じように見えるその大地は、町も山も川も海も、目に見えない放射線にさらされ、自由に歩く事さえ許されない故郷になってしまいました。時が止まった町の映像は私の心を後悔と悲しみでいっぱいにします。ひとりの、子を持つ親として、自然からいただくかけがえのない宝物を私は子どもたちに残していきたいと願っています。その責任もあると思っています。今、私たちは人生の「豊かさ」を何に求めていくかを問われています。再生不可能な宝物を壊しながらそれでも求めていく「豊かさ」。その先には、子どもたちの笑顔で生きる未来が約束されているのでしょうか。それが危ういことに私たちは気付いているはずです。